

## 郷土話方資料 (五)

今から七十年前

昭和七年十二月十日

佐伯尋常高等小学校

紹介者 山本 保

(会員 佐伯市池船町)

昭和七年十二月十日

## 郷土話方資料

佐伯尋常高等小学校

## (五) 毛利高政

城山山上に鎮ります毛利神社は、旧佐伯藩主・毛利氏  
の祖・毛利高政公をお祭りしたものであります。

高政公は、豊臣秀吉がまだ羽柴秀吉といっていた時分から、秀吉に仕えて色々と手柄を立てていました。有名な賤ヶ岳の戦には、柴田勝家の軍を討って、大いに之を破り、秀吉から感状を賜っています。

又、秀吉の島津征伐にあたっては、舟の係となって立ち働き、大軍が下関海峡を渡って、九州に入るのに差し支えないようにさせました。朝鮮の役にあたっては、船方の奉行となつて朝鮮に渡りました。

ある時、敵の船に乗り込んで、散々に斬りつけていますと、かなわぬと思つた朝鮮の人どもは、鉄砲を持ち出して打ってかかりました。そこで、高政公は海にとび込み、敵味方が共に驚いている中を、水をくぐつて自分の船に帰り着きました。武勇、人にすぐれた上、水泳もまた達者であつたのであります。

又、南原という城を攻めた時には、勇ましく戦つて敵を破り、敵の首四十余り取つて、敵はもとより、味方の将士までびつくりさせたことがあります。

この朝鮮の役によつて、秀吉から、旧佐伯領二万石の地を賜り、合わせて玖珠・日田二郡をも取り締まることになりました。のち、秀吉死後、天下の実権が徳川

家康に移るようになって、高政公は、辞世に従って家康に仕え、改めて佐伯の地を賜って、ここに毛利氏の基礎を開いたのであります。

当時は、鶴岡村の梅牟礼に城があつて、佐伯地方の中心になつていましたが、梅牟礼の地はいろいろと便利の悪い点が多かつたので、新たに地を見て城を築きました。

その土地が現在の城山で、鶴谷城と言いました。当時は、佐伯町の地は塩谷の浜と呼ばれ、住む人もなく、アシが茂り、水鳥の遊ぶ寂しい所でしたが、高政公の築城と共に、人々が集まつて来て、次第ににぎわいになつたのであります。

古市町は、梅牟礼城下にあつた町を、高政公が移したので、今でも梅牟礼山のふもとには、古市という部落が残つています。

それから三百年、地の利と人の和を得て、佐伯町は次第に繁栄し、ついに今日の発展を致しています。今や、海陸交通の要地として、東九州の門戸であるばかりでなく、海軍航空隊も設置されて、軍事上からも大切な地になりました。

これみな、三百年の昔、荒地を開いて、ここに城市を

造られた高政公に負う所が多いのであります。されば、町民の高政公に対する感謝の念は、期せずして、毛利神社の創建となり、春秋二期例祭を行なつて、報恩の誠を致しているのであります。

## 地名のルーツ

### ◆葛原浦（蒲江町）

県指定天然記念物、カマエカズラの自生地がある。現在は自生の範囲もせまく、保護されているが、以前は同地一帯に広く自生していた。

同地方では古くから牛馬の飼料にしたので、俗に馬かずらといったが、丸市尾等、他浦からは綱の代用にするため採取に行つたので「つなかずら」と呼んだ。

葛の多い地としてこの地名は起こつたものと思われる。古文書にも「蔓」の字がよく使われている。

### ◆波当津浦（蒲江町）

魚（ハタ）津、波止津、泊津など論義の別れるところであるが、いずれも弱い。やはり端津、果てる津であろう。

宇土崎を廻るともう日州すなわち日向の国である。豊後の国の果てる地、端津から変化したとみたい。

〔蒲江町史〕